随筆

『平家物語』を壇ノ浦で読む

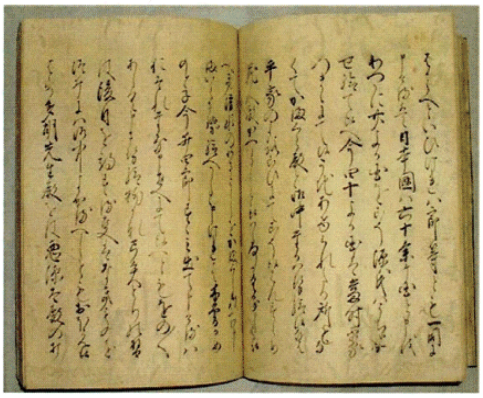
福島 みゆき
ふくしま みゆき

あるとき、新聞の片隅に小さな記事をみつけた。

「長門本『平家物語』（旧国宝・現重文）の解読講座毎月第二土曜一四～一六時、下関市阿弥陀寺町の赤間神宮。講師は元梅光学院大教授の宮田尚さん。受講料七〇〇〇円（年会費・テキスト代込み）」

私は、胸が高まるのを押さえることができなかった。あの平家が源平合戦で滅び、安徳天皇らが祀られている本家本元の壇ノ浦の赤間神宮で平家物語を読めるなんてスゴイ！と思った。高校一年のとき、授業で少し読んだだけだが、ぜひ受講したいとすぐ申込んだ。

山口市の自宅から下関までは、高速で一時間ぐらいで行ける。



赤間神宮は、門司が眼前にみえ、関門大橋のすぐ手前の関門海峡沿いに竜宮城のような出で立ちで建っている。教室は地下にあった。なんと百人ぐらいの人がぎっしり集まっていた。八十歳以上の高齢の人が多かった。実はずっと以前からこの講座は開かれていたのだが、近年亡くなる人が続き、受講者が減ったので追加募集の広告を出したのだそうだ。

私がはじめて出席したのは「屋島の合戦」からだった。あの那須の与一が船上の扇を射ったという場面で有名なところだ。

先生もかなり老齢のしょぼくれたお爺さんだった。「大丈夫かな？」と少し心配になった。ところが、講義が始まると大

豹変！描写がイキイキしていて面白いったらない。さらに他の文献「吾妻鏡」「玉葉」なども参考にするので、ひとつの事象をいろんな角度でみることができる。当時の気候を現在の気象庁のデータとも比較したりしてとってもわかりやすかった。

2016.5.4

赤間神宮で外八文字

下関 先帝祭

赤間神宮本殿で外八文字を披露する太夫

壇ノ浦の合戦で源氏に敗れ、8歳で亡くなった安徳帝を慰霊する「先帝祭」が3日、下関市の赤間神宮などで開かれた。

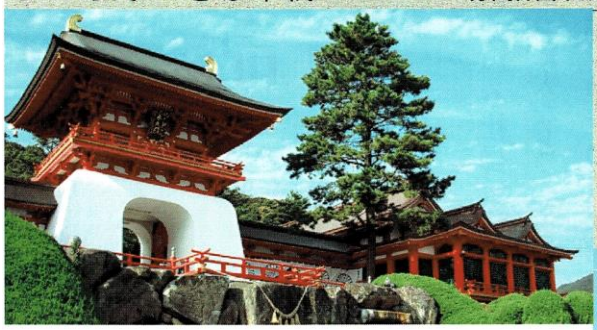
雨のため、豪華な衣装に身を包んだ5人の太夫が市内を練り歩く「上臈道中」や、境内に設けられた空中回廊を太夫が渡って参拝する「天橋渡り」は2年連続で中止となった。

5人の太夫は女官に続いて本殿に参拝し、安徳帝の霊を慰めた。

その後、下関駅前の商業施設「シーモール下関」で外八文字と呼ばれる独特の足さばきを披露した。

日本舞踊未経験者で今年初めて太夫を務めた小橋なつみさん(20)は「とても緊張しましたが稽古をつけていただいた成果が出せ、やりきった気持ちです」と話していた。

源平まつりの武者行列も中止となり、シーモール下関で参加者らがよろいかぶと姿を披露した。



義経の描写も興味深い。「すゝろしきおとこ」という表現がでてくる。「するどく賢い。抜け目がない」等の意か？

また、義経の風貌について

「九郎は、せいちいさきおとこの、色しろきか、むかはそりたるなるそ」と言っている。つまり

「義経は、背が低く、色白で、出っ歯である」

ということだ。今までのイメージと違って笑ってしまう。

いま、遂に「壇ノ浦の合戦」の段に入っている。大興奮しながら臨んでいるところだ。

毎年、五月三日に赤間神宮では「先帝祭」というお祭が賑やかに繰り広げられる。合戦の後入水したが助けられ、その後花魁になった女官らが、亡くなった安徳帝を慰霊するために、赤間神宮（当時は阿弥陀寺）に参拝する道中を再現したものだ。いつも多くの参拝客で大盛況だが、今年は激しい雨天のため屋内のみの実施となって残念だった。

山口に住んで四〇年余り。山口でしか経験できないことをいっぱい吸収してみたいと思っている。『平家物語』・・・これからも大いにたのしみだ。